

壬申の乱（672年）後、天武天皇の定めた「八色の姓」

663年百済救援作戦のために白村江に派遣された倭軍は唐軍により壊滅的敗戦に陥りました。日本ではこの後唐軍の進攻を恐れ、各地に山城を築いたり都を大津に移転する、急遽兵士徴収のため臨時戸籍調査が行われるなど防戦一方の体制を余儀なくされました。

結局、勝者側である新羅と唐の間に不和が生じたり、倭が遠く海を隔てている地政学上の幸運も加わって、唐の侵略はなかったのですが、一連の作戦を指導した天智朝の権威は大きく傷つくことになりました。

壬申の乱は天智死去後跡を継いだ天智の息子大友の皇子と弟大海人皇子との間で争われ、大海人王子が勝利しこの「古代最大の内乱」を制して次の天皇位に就くことになったのです。672年のことでした。どうして吉野に隠遁し無力であったはずの大海人が白村江の敗戦があったとはいえ皇位をついだ大友を制して勝利できたのでしょうか？この時も継体天皇の時と同じく北方よりの力が働いているのです。

八色の姓で最高の「真人」の姓を与えられ天皇の親族とされた氏の名前と出身

守山	路	高橋	三国	當麻	丹比	猪名	坂田
近江	近江？	膳部担当	北方古来	天武味方	宣化王子	宣化の末	継体由来
羽田	息長	酒人	山道	茨城			
息長同族	北方古来	継体由来	息長同族	？			

もちろん継体天皇の就位（507）と壬申の乱（672）の間には150年以上の隔たりがあり、豪族たちの離合・集散・消長がなかったわけではありません。典型的なのは三尾でしょうか。三尾は継体の時は典型的北方豪族でしたが、壬申の乱時は大友王子側についたと見え、日本書紀の記述でも琵琶湖北西の三尾城が陥落して乱の決着がついたとする記述があります。

大海人皇子は海部氏によって幼少期を育てられました。天武天皇の死去時「壬生の偲び事」という幼少期の思い出を申し上げたのは海部氏でした。対して大友皇子が百済系の氏族によって育てられたことが「壬申の乱」の勝敗をわける要因になったのかもしれませんが。

日本書紀にはそれまでの新羅憎しと百済に肩入れする表現が多く出てきます。しかし白村江の戦い後は応援しても百済は二度と復活しませんでした。